

絵本の読み聞かせボランティア活動の継続要因に関する研究 ー 20 年以上の経験を有するボランティアへの インタビューを通してー

谷原舞, 田中卓也*¹, 中島眞吾*², 小久保圭一郎*³, 岡野聡子*⁴

要 旨

本研究は「読み聞かせボランティア活動を継続する要因は何か」、「読み聞かせボランティア活動の世代継承性における課題は何か」を明らかにするために、20 年以上読み聞かせボランティア活動を行っている A 氏に対して、オンラインによる半構造化インタビューを実施した。読み聞かせボランティア活動力の継続要因として、①心の拠り所となった絵本、②楽しみにしてくれる子どもたちと絵本を味わう時間、③地域での社会貢献による自己肯定感、④フレキシブルな職場環境や応援してくれる家族の存在、⑤一緒に楽しめるボランティアグループの雰囲気があることがわかった。世代継承性における課題としては、①活動仲間との交流の減少、②絵本を届ける立場であるボランティアとしての成長、③グループ内での経験値・知見統合の困難さ、④グループの継続や後継者育成における問題があることが明らかとなった。

Keyword : 絵本, 読み聞かせボランティア活動, 継続要因, 世代継承性

1. 問題関心

1-1 読み聞かせボランティアの広がり

現在、地域の図書館、児童館、学校などさまざまな場所で、地域の子どもや保護者に対してボランティアによる絵本の読み聞かせや素話等を行うお話会が行われている。『全国読書グループ総覧 (2018 年度)』¹⁾によると、乳幼児を対象とした読書推進の実演ボランティアのグループ (読み聞かせ、紙芝居、人形劇など) は、2013 年度が 7090 件、2018 年度では 8028 件と 5 年間で増加が見られ、読書推進におけるボランティアの存在の重要性がうかがえる。広瀬²⁾によれば、「子どもたちに本の楽しさを伝えたいと願って、読み聞かせやおはなし会、ブックトークをしたり、学校や地域の図書館の整備をするなど、子どもと本を結ぶさまざまな環境づくりをしている人の総称」を「読書ボランティア」と呼ぶと述べている。本研究ではこの中の「読み聞かせ」活動を取り上げる (以下、「読み聞かせボランティア活動」と記す)。

1-2 読み聞かせ活動における課題

佐久間ら^{3,4)}は、高齢者による子どもたちへの読み聞かせ活動について調査した結果、高齢者にとって日常生活の活動性に寄与する可能性や認知機能維持に効果的であることを示している。脇谷⁵⁾はボランティアをすること=生涯学習とし、ボランティア活動には学びが必要であり、学びによって自身が成長できると述べている。

このように、読み聞かせボランティア活動を行うことは読

み手自身においても良い影響を与えることがわかる。

広瀬⁶⁾はこれまでの読み聞かせ活動を振り返り、子どもと本を結ぶ上での課題をあげているが、まとめると次の点である。

- ・本を選ぶことへの悩み
- ・書店の減少や映像文化の拡大
- ・若い世代への継承、若い世代との繋がり
- ・参加する子どもの低年齢化

これらの課題のうち、本研究では主に若い世代への継承、つまり世代継承性 (Erikson⁷⁾) にも着目する。

1-3 ボランティアグループの継続要因と課題

絵本の読み聞かせボランティア活動の継続要因に関する研究は見られなかったが、地域の子どもと保護者に関わるボランティア活動に着目した研究をとりあげる。田中ら⁸⁾は、子育て支援ボランティアグループの継続要因を明らかにするために、ボランティアメンバー 12 人 (平均活動期間 14 年 (5~17 年)) に対して継続理由等に関する質問紙調査を行い、そのうち主要メンバー 2 人に対して、グループの活動、推移、実績について聞き取り調査を行っている。その結果、ボランティア活動の継続理由として、「メンバー間の関係性 (例: 地域の中で多くの仲間ができる)」、「地域活動の意義 (例: 数あるボランティアの中で自分の力でもできそうだから)」、「自分自身

*¹ 育英大学 教育学部

*² 中部大学 現代教育学部

*³ 倉敷市立短期大学 保育学科

*⁴ 奈良学園大学 人間教育学部

の楽しみ（例：子どもの成長が楽しみ）」「元気になる（例：自分の生活に活気が出てくる）」があげられていた。また、地域でコミュニケーションを行うようになり、世代間交流によって若い母親を理解する機会にもつながったと述べられている。

ボランティアグループの継続要因についての考察では、「グループメンバーが保育士や幼稚園教諭、民生児童委員等、子どもに関する職業経験や社会的役割があること、子どもが好きで、子育て支援ボランティアを通じて母親世代と接点を持ち、地域で頼りにされる存在としてやりがいを感じていること、ボランティア活動が地域の仲間と交流できる機会であり、さらには自分の可能な条件で無理なく参加できること」が示されていた。

一方、ボランティア活動の世代継承性に関わる課題として「①スタッフの高齢化に伴う課題（活動の縮小、IT 機器の活用及び交付金申請事務処理の困難さ）、②運営上の課題（少子化により地域内の参加者が集まらない、運営資金確保困難など）、③新メンバーの確保困難、随時参加メンバーが早期就労するため活動性が低下する」があげられているが、調査時から過去 5 年間の活動は概ねそれまでの活動と同等の規模で継続されている。

田中らが対象としたボランティアグループは、所属のない就学前の子を持つ親の集う場と食育の一環として地産地消の食材を活用した昼食を提供することを活動目的としており、本研究が着目する読み聞かせボランティア活動とは活動の目的や内容が異なる。

そこで本研究は、読み聞かせボランティア活動の継続要因を探り、世代継承性に関する具体的な課題を示すことを目的とする。

なお、田中らの研究ではボランティアグループの継続要因を探るため、経験年数の 5 年～17 年のメンバーそれぞれの「継続理由」や基本属性を質問紙によって尋ねる形をとったが、本研究では、調査対象者がなぜ長年ボランティアを続けてこられたのか、対話を通して継続要因を探るために、半構造化インタビューを用いることとする。

1-4 本研究における問い

以上の研究を踏まえて本研究では、読み聞かせボランティア活動を長年続けている人物（以下、A 氏）の語りを基に以下の 2 点を明らかにする。

- ① A 氏が長年読み聞かせボランティア活動を継続してきた要因は何か
- ② 読み聞かせボランティア活動の世代継承性における課題は何か

2. 調査方法

A 氏（66 歳）を調査対象者とした。A 氏は、1999 年から 20 年以上、T 市で読み聞かせボランティア活動を行っている。2000 年の子ども読書年を皮切りに読み聞かせボランティア活

動が広がり始めた頃、A 氏も活動をスタートした。それから 20 年経った今、次の世代の活動にとっての参考になればということでお引き受けいただいた。

調査方法は、オンラインによる半構造化インタビューである。調査は事前に作成したインタビューガイドをもとに、2021 年 3 月 30 日（火）に 2 時間 30 分間行った。主なインタビュー項目を以下に示す。

- ① 絵本に興味を持ったきっかけ
- ② 読み聞かせのボランティア活動による、自身の生活（または自分自身）への影響や変化
- ③ 絵本の読み聞かせボランティア活動を 20 年続けてきた中での苦悩、喜び
- ④ 長年、読み聞かせボランティア活動を続けられた一番の要因
- ⑤ A 氏にとっての読み聞かせの意義・位置づけ

なお、本研究は大阪信愛学院短期大学研究倫理審査委員会（R3-05）の承認を得た上で実施した。

3. 結果

A 氏が読み聞かせボランティア活動に関わるようになった経緯と活動の様子について、加納⁹にならい、インタビューをもとにストーリー化して記述する。インタビューデータの引用については、A 氏の語りの冒頭に「A：」、インタビューの語りの冒頭に「*：」を示す。なお、語りの下線部分は考察に関わる点として筆者が引いたものである。

3-1 A 氏の生い立ちと絵本との出会い

幼児期

A 氏は、昭和 30 年に中山間地域の農家に生まれた。両親は共に働いており、幼少期は野良でばかり遊んでいたが、体が弱く熱を出して寝込むことも多かった。

近所では身近に子どもや親が絵本を読んでいる風景というものではなく、もちろん A 氏の周りにも絵本はほとんどなかった。それでも、A 氏が熱を出した時は時々母が『イソップ物語』を読んだり、12 歳上の兄が布団の中でお話をしてくれたりした。

A 氏としては子どもの時の絵本との関わりはそれくらいで、将来読み聞かせボランティアを始めるきっかけとなるような事柄はあまりないと感じている。

A：自分自身は、そんなに子どもの頃に絵本を読んだ記憶がほとんどなかったんですが、それをきっかけに思い出してみると、本屋に親戚がいて、お祭りの時に絵本をときどき持ってきてくれていて、それが『イソップ』と『幸せの王子』は、カラーで思い出すくらい、たぶんそれほどじっくり見てたんだと思う、他になかったから。そういやその二冊は自分にすごく心に残っているなと思います。

学童期

中学・高校の時には、同居していた二人の甥っ子上の子に、子守りのため何度か絵本の読み聞かせをしていた。

しかしその時は絵本に対する知識が全くなかったため、家に数冊置いてあった絵本を適当に読んでくだけで、頻繁に読んでいたわけではなかった。

青年期

短期大学に入学して1年生の時、絵本とA氏をつなぐ大きな出来事が起こる。授業の中で絵本を紹介し合うため、一人一冊持ってくるという課題が出されたのである。

A氏はいろいろとところで推薦されていた、かこさとしの『だるまちゃんとてんぐちゃん』を持参した。すると、先生に良い本を選んだととてもほめてもらい、そのことは今でも思い出すエピソードとなった。

それから、2、3歳の甥っ子にもその本をよく読んであげるようになった。ある時、その甥っ子が高熱の病気になり、二日ほど意識不明になってしまう。ようやく意識が戻った時の第一声は、あの『だるまちゃんとてんぐちゃん』に出てくる“てんぐちゃん”との会話であった。周囲の大人たちがわからない時の中で、甥っ子はその“だるまちゃんとてんぐちゃん”と遊んでいたのである。その時A氏は、その絵本が甥っ子の心にびたっと入っていったのを目の当たりにし、病気の時に支えてくれたその絵本と甥っ子が出会っていたことを本当によかったと思った。

それと同時に、絵本の力はすごい、とてもやさしく素敵な世界だなと思ったのが、絵本を重視するようになったきっかけである。A氏はそこから絵本を選ぶ大事さを知り、絵本にこだわるようになっていった。

3-2 A氏の読み聞かせボランティア活動の実際

成人期～壮年期

20歳の頃、A氏は保育士になる。子どもたちには絵本が大事だと感じていたので、できるだけいい本を読んでいこうと、保育園ではなるべく読み聞かせの時間を確保して一生懸命子どもに絵本を届けていた。

四年間保育士を務めた後、短期大学教員として着任し、29歳で結婚、30歳で出産し、その後3人の娘を育てた。夫は自営業で、祖父母とも同居している。

37歳の頃、A氏が住んでいるT市の図書館がストーリーテリングの講座をしているのを、広報誌で発見した。親しい友人から、仕事に役立つかもしれないし楽しそうだからやってみないかと誘われ参加した。そこで、A氏と誘ってくれた友人、子育て中の母親や図書館司書たちと講座が始まった。それから1年経った時、講座の先生から「地域に出て、ボランティア活動をしなさいよ」と言われ、A氏たちはグループ名を考えボランティア活動を開始した。1999年のことである。

A氏のボランティアグループが発足した当初のメンバーには、子育てをしている若い母親が多かった。ボランティア活

動場所は主に近くの幼稚園であり、ストーリーテリングを中心に絵本の読み聞かせも含めたおはなし会を実施していた。

講座の先生は、引き続きA氏たちのボランティアグループの指導者として、メンバーの読み聞かせを褒めたり指導したりしてくれた。

また、A氏の住むT市には他にもいくつか読み聞かせボランティアグループがあり、県民局を通じてネットワークができていった。A氏はネットワークができた最初の10年、責任者を務めた^{注1)}。地域を越え、隣の市とも共同して「一緒に読書を、この地域で広げていきましょうよ」というのがスタートだった。県民局の生涯学習課が事務局になり、力を入れてネットワークを掘り起こし、そこからつながっていった。

A氏が絵本に関心を持ったことで、A氏の家でも絵本が置かれるようになっていった。しかし、家で子どもたちに絵本の読み聞かせを多く行っていたのは自営業の夫や祖父である。A氏は仕事上子育てに関わる時間が少なかったが、夫や祖父が中心となって子どもに絵本を読む習慣は、家族をつなぎ、子どもたちにとって楽しい体験になっていた。

A氏は読み聞かせによる子育てについて、「何かを育てようとかいうような目的じゃなくって、親として楽しいこととか、大事なことを絵本を通して伝えてきた」と述べている。A氏や夫、祖父母は、絵本から学べることをあえて伝えようとしていたのではない。「絵本を楽しむ」ということを絵本で子育てをする上での基本的な理念として、読み聞かせをしていたのである。

今ではお祝いの時に子どもたちが母親や友人に絵本をプレゼントすることも多く、自然と娘たちには絵本の魅力が伝わっていたのではないかと思っている。詳細は後に述べるが、三女が中学時代、辛い時期を体験した際に、絵本が親子を支えたこともあった。

老年期

現在A氏は短期大学で保育者養成に携わり、絵本の魅力や子どもと絵本を楽しむ世界について、学生に講義を行っている。

読み聞かせボランティア活動歴は20年を超えた。グループは14～15人で、全員女性である。今でも毎月第二土曜日に、打ち合わせとおはなし会を行っている^{注2)}。20年経った今、ボランティア仲間は高齢化し、グループでは資金集めをしながら後継者を育てる活動に力を入れようとしている。

4. 考察

前項のA氏の読み聞かせボランティア活動に関わる経緯や活動の様子を踏まえて、A氏の語りから本研究の二つの問いについて考察を行う。

4-1 A氏が読み聞かせボランティア活動を継続する要因について

A氏の語りから読み聞かせボランティア活動を継続する要

因について探ったところ、次の5つにまとめられた。

4-1-1 A氏の継続要因①：心の拠り所となった絵本

A氏は次のように、絵本は心の拠り所となっていると語っている。

＊：独身の頃の絵本の捉え方と、子どもが生まれてからは変化はありますか？

A：子どもが生まれてから、結婚してから、あのやっぱり心の拠り所に絵本がなったと思う。とっても何かこう、結婚するということ、そういう頃に絵本が近くにあったから、救われたなって思うことはあったと思う。子どもにも。私は子どもにも絵本を読んだって言う割にはあんまり読んでなくて、絵本は用意したけれども、家族が大勢いたから、私があまり子育てに出る幕はあまりなかったんですね。だけど、家族は子どもたちに読んであげて、その様子を見てても、絵本っていうのはあの家族をつなぐなあとか、子どもたちがとても楽しい体験になるんだなあとかと思いましたね。(中略)『花さき山』とか、『100万回生きた猫』とか、『スーホの白い馬』とか、『さっちゃんのまほう (のて)』とか、なんかそこら辺の本と出会ったことは、何かこう、あの私はとてもありがたかって、その絵本が言ってることが真実って言うか、人として大事なこと、生きる生き方として大事なこと、そういうことを、あの絵本から私は学んだと思うんですね。でやっぱりあの、辛いなあとか、思う時に、やっぱり真実っていうのが、ちゃんと絵本が教えてくれた、それがあったから乗り越えられたな一つって思う。

A氏は特に結婚、出産してから、絵本が心の拠り所になり、人として大事なことや生き方として大事なことを絵本から学んだと語っている。

次の語りは、三女の中学時代にあった辛い時期を絵本によって乗り越えていった時の話である。

A：三女が中学の頃にですね、学校で辛い時期があったんですね。それで、見てるだけでも辛くて、親としても、もう学校行かんでもいいわ一つって時がちょっとあったんです。

それでも学校へ行く子ども見てて、今日1日無事帰ってくるかしらとか、まさか自殺とかせんよなあとか言っていた時、そんな子育てしとらんじやろうって夫が言って、そんなに弱いことはないわって言って、私らは本当にこう、絵本と一緒に随分読んできて、楽しんで、その生きることとか、その個々の存在の大事さみたいなことを、絵本に心をのせて伝えてきたな一つ、二人で話したことがあったんですね。

で、絵本で子育てしていたことは、その何かを育てようとかいうような目的じゃなくって、親として楽しいこ

ととか、大事なことを絵本を通して伝えてきた一つということが、なんかこう共通の思いが出て、いいことしてきたな一つって思ったことがあったんよね。

で、まあ、そんなやわな子じゃないじやろうって、腑に落ちた。たくさんいい絵本と一緒に楽しんで、何が生きることに大事かとか、人として何が大事かっていうのは、絵本を通して伝えてきたな一つというのは、あつてよかったなあと思います。

A氏は三女が中学時代に思い悩んでいた時、親として大変心配していた。しかし、これまで絵本を通して大事なことを子どもたちに伝えてきたということを夫の言葉から振り返り、子どもを信じる気持ちへと変えることができた。三女のことを「そんなに弱いことはないわ」と考える背景には、「生きること」や「個々の存在の大事さ」を絵本に心をのせて伝えてきたという自負があるからである。

このように、A氏やA氏の夫は絵本を通じて自らの子どもたちにも大事なことを伝え、絵本との出会いが、子育て等でのつらい経験を乗り越える糧となった。絵本がA氏自身や家族の人生に影響を与え、心の拠り所となっている。

このことは、長年A氏が絵本を信頼し、読み聞かせボランティアとして継続していく要因となっていると考える。

4-1-2 A氏の継続要因②：楽しみにしてくれる子どもたちと絵本を味わう時間

ボランティア活動を長年継続することができたことに対する一番の要因について、A氏は次のように語っている。

A：喜びっていうのかなぜ続けてこられたかっていうのは、本当に楽しかったね。子どもの読み聞かせをしているとか、お話を聞いている時の顔っていうのは、本当になんかこう、私が一人見るのはもったいないと思うぐらい、輝いて綺麗なんですよ。綺麗な目して、一生懸命聞き入ってるって言うのはもう素晴らしいって、それはとても良かったなと。(中略) 本当に自分一人で絵本を読むのと違って、子どもが喜んでくれるって、それで一緒にその世界を味わうっていうのは、すごく贅沢な時間と言うか、楽しい時間です。で子どもたちが楽しみにしてくれてるって言うのが、何よりも嬉しい。続けられる。

A氏が読み聞かせボランティア活動を20年も続けられた要因としては、「子どもたちが楽しみにしてくれるから」というのが一番の理由のようである。喜んでくれる子どもと一緒に絵本の世界を味わうことが、とても贅沢な時間であると述べられている。

宮澤¹⁾は、学校における読み聞かせについて読み手が考える意義に着目し、読み手としてのボランティア、教師、中学生に対して半構造化インタビューを行っている。その結果、読み手が考える「読み聞かせの意義」として、子どもから即

時的フィードバックがあることや、子どもとのコミュニケーションが活動の原動力となっていることがあげられており、このことはA氏の語りとも一致する。

A：届けるっていうことは、本当にたくさんのものが返ってくる、ありがたいことだと思うんです。もう本当に幸せだなと思うんです。子どもたちに出会うと、本当に力をもらい、初めての会だったら、もうほんとてんやわんやの時もありました。聞くことに集団で慣れてないというグループも、子どもたちのグループもあったりするから、でも二回三回とか、1年2年先になると、本当にみんな楽しんでくれるようになったりして、すごい力を持つて思うんです。だから出会いは宝物に思っています。

A氏は、始めは慣れなくとも、回を重ねるにつれて子どもたちも楽しんでくれるという成功体験を語っており、このような体験はボランティア活動を継続させる要因の一つであると考えられる。A氏はこれまでの経験の中での絵本やボランティア経験を通した「出会い」を、「宝物」と表現している。

4-1-3 A氏の継続要因③：地域での社会貢献による自己肯定感

次に語られる、読み聞かせボランティア活動をすることに伴う貢献感も、継続要因として当てはまると考える。

A：色々な事を、社会貢献できると思うけれども、読み聞かせとか、お話しは、私でもできるというか、私ができる。私がその音楽だとか絵を書くとか、一緒にダンスを、フォークダンスするとかそういうことはできないけど、絵本を楽しむことは私にもできるって言うか、良かったなあとと思うし、それからそういう風にボランティアが続けられる。

読み聞かせボランティア活動が、自分にもできる社会貢献であると実感したことが、A氏のボランティア継続につながっている。また、地域で社会貢献することによるA氏自身の変化について、次のように語っている。

＊：読み聞かせボランティアを経験して、ご自身に何らかの変化がありましたでしょうか。

A：(中略) そういうボランティア活動に出るようになって、子どもたちに喜んでもらえたり、幼稚園やそれから図書館で読んでても、その地域の人、保護者の方が、子どもが帰って、今日は絵本のおばちゃんが来てくれたんよって言いますとか言って、大人から反応ももらったりすると、そういうつながりもできて、なんか地域の中で自分の事が役に立つと言うか、喜んでもらえる存在なんかなっているのを感じる機会が何回かありまして、なんかこ

う、居場所が感じられるような気がします。そういうことが、自分自身の自己肯定感とか、楽しい充実感になっていったなあとと思います。

読み聞かせボランティア活動による社会貢献によって、A氏自身が、地域の中での居場所を感じることができ、それが自己肯定感や充実感へとつながっていることがわかる。

4-1-4 A氏の継続要因④：フレキシブルな職場環境や応援してくれる家族の存在

A氏は、活動を続けられた背景には、フレキシブルな時間帯での出勤が可能な職場環境や、応援してくれる家族の存在があると語っている。

A：職場で、朝ちょっと思って行くとか、早めに出てまた帰ってくるとか、なんかそんなことがあったし、家庭もそれを応援してくれたかなと思います。

＊：ありがとうございます。朝、行かれるというのは、授業の前に、研究日に？

A：そうそう、授業の前に。幼稚園に寄って、話をして、行くとか、途中ちょっと思って10時ぐらいとかだったら、朝行くと、途中抜けてから行くとか、そういうこと、たびたび許してもらいながら。

A氏自身は職場環境も家庭環境もボランティアを続けやすい環境に恵まれていたが、A氏が所属するボランティアグループでは、始まった時から20年経った今、生活状況が変わり活動の参加ができなくなったメンバーも出てきている。

A：私が所属しているボランティアグループは一つなんです。で14、5人いるんですけど、残念なことに、男性が一回だけ入ってくれたんですけど、すぐ消えちゃって、いなくなっちゃった。でも、女性ばっかりなんですわ。始まった頃は、さっき子育てをしている若いお母さんたちが結構多かったって、あと図書館司書とか、言ってたんですけど、その人たちもだんだんだんだん子どもが小学校に入った時くらいから、仕事を始めて、フルタイムで働く人が増えたんです。だから、そういう面でも、職場を休んででも、ボランティアに参加できる、そういう人でやっているんですが、仕事がフルになってなかなかボランティアに参加できないっていう人も、あの確かに出てきています。ただでも20年間続いているから、みんなが楽しい活動だっていうのは、共有してるんだと思ってるって、ボランティアずっと続けたいなっていう思いはずっと変わらずにあるんだろうと思います。

A氏によると、子育ての始めの頃はボランティア活動に参加できていたが、子どもが大きくなりフルタイム勤務になると、なかなか参加できなくなる人が出てきている。このこと

から、ボランティア活動の継続要因として、参加しやすい職場環境と家庭環境が重要であることがわかる。

4-1-5 A氏の継続要因⑤：一緒に楽しめるボランティアグループの雰囲気

ボランティア活動を20年以上続けていく中で、常に順風満帆に活動できてきたわけではないと考える。そこで、活動の中での葛藤について尋ねた。

＊：どこかで葛藤ってなかったですか。(中略)

A：ボランティア活動については、なかった。ボランティアに来ると、気持ちが安らぐっていう、月に、週に土曜日、土曜日が研修のついでとか、みんなが集まってくるパターンだったのよね、一週間に一回。なんかここへ来ると、なんか仕事のことも家族のことも何も忘れて、みんなその上下関係もなく、絵本とかお話を一緒に楽しむと、そういうメンバーだったから、そこへ行くとほっとするっていう感じはあったかな。

ただ最近少し、いろんな風が吹いてきて、メンバーも少し変わってきて、ちょっとそういう風があの、薄くなってきたなっていうのは、他の人達とも話をして、私たちが20年続けてきたのはそういうものがあつたから来れたんだよねあつて、ちょっと原点に戻って、その雰囲気大事にしたいよなあって、技とか、ねばならないに入ってしまうとしんどいなあってついこの間も話しました。

20年続ける中で、葛藤というものはなかったと言う。それはA氏にとって、上下関係なく一緒に絵本を楽しむことができる、ほっとするメンバーだったからこそであり、その雰囲気を大事にしていきたいと語っている。このことから、ボランティア活動を継続して行うためにはボランティアグループの雰囲気も重要であることがわかる。

4-1-6 A氏の継続要因に関するまとめ

以上より、A氏の読み聞かせボランティアの継続要因について、①心の拠り所となった絵本、②楽しみにしてくれる子どもたちと絵本を味わう時間、③地域での社会貢献による自己肯定感、④フレキシブルな職場環境や応援してくれる家族の存在、⑤一緒に楽しめるボランティアグループの雰囲気があることがわかった。

安達¹⁰⁾は、絵本の読み聞かせも含めた読書ボランティアについて、「なにより活動は、(1)楽しく生きがいを感じるものであること。(2)良き仲間恵まれること。(3)無理がないこと。この三点がボランティア活動を支え長続きさせる要因ではないか」と述べている。(1)については、A氏の継続要因①の「心の拠り所となった絵本」、②「楽しみにしてくれる子どもたちと絵本を味わう時間」、③「地域での社会貢献による自己肯定感」、(2)については、継続要因⑤「一緒に

楽しめるボランティアグループの雰囲気」、(3)については継続要因④「フレキシブルな職場環境や応援してくれる家族の存在」が関連し、本研究のA氏の語りからも裏付けされたと考える。

(1)と継続要因①との関連について補足すると、絵本が心の拠り所となるものであるとA氏自身が感じたからこそ、読み聞かせを通して子どもたちに絵本を届けていくことを生きがいと感じ、継続して絵本に携わっていくエネルギーへと繋がっているのではないかと考える。

4-2 A氏の語りから見える読み聞かせボランティア活動の世代継承性に関する課題

本研究の二つ目の問いである読み聞かせボランティア活動の世代継承性に関する課題について、A氏の語りから、以下に4点あげる。

4-2-1 活動仲間との交流の減少

活動仲間との交流としては、グループ内の交流と、他のグループとの交流がある。

グループ内の交流については、A氏のグループでは選書についてメンバーで情報共有し、よかった絵本を取り上げたりしているが、メンバーのスケジュールが合わず実施できない日もあると語っている。

他グループとの交流については、次のように語っている。

＊：読み聞かせボランティア同士のネットワークはどのようにつくられていますか？

A：よかったなあと思うんだけど、私たちのグループも、それぞれみんな仕事が忙しくなって、よそとつながることも難しくなったりとか、それから他のグループも高齢化していったりとか、あの県民局の事務局が、その移動した。県民局がなくなっちゃったんですね。あのなんか私たちの地域にあった県民局は縮小してしまって、生涯学習課とかいうのはもう、T市にはなくなっちゃったんで、そういう事務局を引き受けてくれるところがいなくなったというのは、なかなか、難しかったですね。ちょっと経ち切れちゃったんです。10年ぐらいで。だけど、やっぱり、細々とでもやっていかなきゃなと思っているところです。

＊：今ストップしているところということですね。

A：唯一、ブックスタートをその頃、ネットワークを作った頃に市も取り組んでくれて始めたんです。いろんなボランティアグループが、交代で月に1回のブックスタートを3か所くらいでやってるのかな。3、4か所。そういうブックスタートに取り組む、話し合いが年に1回あるのは、せめてものネットワークが存続してるかな。

広瀬(2019)によると、「子どもにとってよりよい本との出会いを実現するために、自分にとっての学びを豊かにし経験

交流を大切にしていこうこと、(中略) ボランティア活動から学んだ共有の問題を改善していくために、経験を共有すること。こうした原則を確かめ合ったことがあります。これは今も、これから大切に守っていきたいことだと考えています」と、子どもと本を結ぶ存在として、同じ活動をしている者同士の交流は重要であることが示されている。

A氏のボランティアグループがあるT市でも、県民局の支えによって、A氏のボランティアを中心に読み聞かせボランティアのネットワークが広がっていったが、行政の縮小やメンバーの高齢化によって途絶えてしまっている。よりよい読み聞かせ活動の実現に向けて、他グループとのネットワークを復活させる必要があるだろう。

4-2-2 絵本を届ける立場であるボランティアとしての成長

A氏は、読み聞かせボランティアとしてトレーニングを行うことが必要であると語っている。

A：やっぱり、それぞれのグループで味があっていいよねでいいんだけど、そこまでいくのに、ボランティアっていうことで、誰もがとつきやすいところもあるけれども、相手に対して届ける役なので、あの、やっぱりこう学び合って、それなりの準備をしないといけないと思うんですね。(中略) あの絵本だから読めると思っている人もあったり、紙芝居だからすぐできると思って、子どもが喜んでくれると思ってるような人に出会ったこともある。だから、やっぱりあのなめたらいいんよ、って、それなりの準備とトレーニングは、自分自身に対していかなきゃ、そしてそれをグループでできたらいいと思うから、そういうグループで一緒に消化していったら、自分たちのグループのレベルを上げていくことは、ずっとしていかなきゃいけないと思うんです。

読み聞かせボランティア活動を行うためには、グループのレベルを上げていくことが必要であると述べている。ボランティアとして成長し続けていくことは、世代継承性における課題でもあるだろう。

A氏が考える成長のポイントとしては、「選書」と「読み手としての心構え」があげられる。

A：大事にしてるのは、丁寧にその作者が作った言葉だとか、語り継がれてきた言葉が文字になっているものを伝えていく役をさせてもらってるから、あのあまりその、何て言うのかな、自分の色を出したりとか、誇張したりとか、それから心を大事にして心をのせて届けていくようなことをしていかなきゃいけないなっていうのは思っています。はい。絵本は読み手それぞれにそれぞれの味があって楽しいから、上手下手の世界ではないような気がします。届けるなりには責任を持って届けると言うか、あの初めて開くようなことはしちゃいけないんだけど

も、この本を届けたいなとか、このお話を届けたいなと思ったら、あのそれを、その人なりのものを楽しめるようにしたらいいなと思っています。

A氏によると、読み聞かせの技術というよりも、読み手が届けたいと思う本を、自分なりに楽しめるようにしたら良いと語っている。つまり、まずは読み手が届けたいと思う本を選ぶことが大切である。

また、A氏が絵本を選ぶ時に意識していることとして次のように語っている。

A：本当に届けるって言うことは、まあせめて自分が納得のいく、あの愛おしいとか楽しいとか、美しいとか、なんかこう、自分がそれに価値を見たものを、届けなきゃいけないなって思っています。

A氏は絵本を選ぶ際、「本物を届けなければならない」とも述べている。脇谷も選書について、「優れた作品は子どもの育ちに良い働きをします。自身の本を選ぶ目を磨き、子どもたちに優れた読み物への橋をかけることを意識してください」と述べ、「どの本を選ぶかは、上手に読むことよりも大切です。(中略) 子どもに適切に本を手渡すためには、子どもと子どもの本について十分な知識を持ち、子どもと本をつなぐ方法をきちんと学んだ方がよいでしょう」と述べている。広瀬(2019)も、ボランティア活動に伴う具体的な問題の一つとして、「選書」に関する課題をあげている。

笠井²⁾によると、読み聞かせボランティアは、保育士や司書に比べて、選書の視点が「個人的な好み・楽しさ」「子どもへの意識」「おすすめの作家・作品」など多次元にわたっており、視点を統合できない困難さが選書のプロセスを流動的なものにしてると述べられている。このことは、読み聞かせボランティアにとって選書がいかに困難であることを示している。

以上のことから、「選書」は読み聞かせボランティア活動にとって重要かつ困難なものであるため、活動をよりよくするためには「選書」のトレーニングが必要であることが示唆された。

次に「読み手としての心構え」について、A氏は次のように述べている。

A：丁寧に届けることを私はしないといけないと思うっていうか、それがまずとても大事な良い出会いのポイントだろうと思うんです。

だから、絵本が自分がどんだけ好きだからとか、自分が前に出ると言うか、読み聞かせてあげるんじゃないかって、聞いてもらおうと言うか、あのそういう風な平等な立場での活動だなあと最近思うんですね。だから、一緒に聞き手と読み手と一緒に楽しんで一緒に作る世界だと思うから、一方的にどっちかが強いとかいうことではない

ような出会いにしていきたいなあと思ってる。(中略)

いい絵本とも出会いたいし、その、なんていうのかな、聞いてくれる人に対しても、謙虚に言うとか、あの絵本の読み聞かせという言葉があんまり好きじゃないけど、でもこれがまあ公用語のようなので使うけど、読み語りとか読み合いとか色々言ってる、言葉ね、それもいいなと思うんですけど、そういう絵本の世界は他者と一緒に楽しむってことは、本当に一緒に作るもんだと思うこと、ものすごく最近感じるんよね。子どもに読んでやるんじゃないかって、子どもと一緒に楽しむっていう感じ。

で、そんな時に絵本があるっていう感じ。その絵本も、やっぱり作者なり、長年伝わってきた力を持ってるものだから、丁寧に扱わなきゃいけない、伝えていかなくちゃなと思ってます。

A氏は「読み聞かせ」という言葉をあまり好んで使っていない。読み手が聞き手に絵本を読むという行為は、読み手が一方的に聞き手に与えるものではなく、読み手と聞き手が一緒に絵本の世界を楽しむことであるという、読み手の謙虚な心構えが必要である。

また、前出の「大事にしているのは、丁寧にその作者が作った言葉だとか、語り継がれてきた言葉が文字になっているものを伝えていく役をさせてもらってる」という語りにも見られるが、A氏は聞き手と一緒に絵本の世界を楽しむ中で、作者の思いや、長年伝わってきた力を持っている絵本を、読み手は丁寧に扱い、伝えていかねければならないと述べている。絵本文化を伝えていくという読み手としての責務を、ボランティア自身が認識しておく必要がある。

以上のことから、読み聞かせボランティア活動を行うには適切な選書と読み手としての心構えが重要であり、どんなに長年続けているボランティアであっても、トレーニングが必要であることがわかった。世代継承性において、よりよいボランティア活動を求め続けるために、このことは次世代へと引き継ぐべき、経験者の知見である。

4-2-3 グループ内での経験値・知見統合の困難さ

次の語りでは、読み聞かせに関する研修を受けてきたメンバーが他のメンバーに教える中で、メンバー間で温度差が生まれてしまったことについて述べられている。

A：そこでビシビシ叩かれて辛い思いして帰ってきた。で、やっぱりそれなりのものを、自分たちは勉強してきているから、それを私たちに教えてくれるんだけど、そのギャップがあって、ついていけないし、(中略)、そこまで鍛えてもらわなくてもいいんだけどな、とかなんか思っちゃう思いもあったり、あの今まではみんなでよいしょよいしょと言うか言いながら、あのやってきたのが私たちのグループの特徴なので、それは確かに見てたら生ぬ

るいかもしれないですが、そういうところの、あのこれじゃだめなんじゃないかなとか、そこの厳しいグループで習ったことをそのまま持って帰られると、あのちょっと消化不良も起こるし、どうかなっていうのが今正直あるんです。だから、やっぱり、みんなで行くのに、我慢する方と、教えられる、教える方にならないように、ここのグループではみんな一緒にやっぱりよさっていうか、ずっと続いてきたのが楽しかったから、その楽しさを、もういっぺん大事に共有できるようなグループにして行きたいな一つてちょっと声が出だしてきたように思えます。(中略) 私も今話してて気が付いたんだけど、なぜ新しい風が受けられないかと言うと、私達が否定されるってところがあって、それがちょっと辛いんだろうと思うんですね。

ボランティアグループの成長を目指すために、研修で得られた知見をグループ内で共有することは決して悪いことはないが、他のメンバーに考えを押し付けてしまうと教えられる側は否定された気分になり、温度差が生まれてしまう。グループ内で、各メンバーの経験値や知見を統合することの難しさが示唆されている。

東京ボランティア・市民活動センターによる『ボラ市民ウェブ』¹⁹⁾では、ボランティア活動の4原則が示されている。①自分からすすんで行動する―「自主性・主体性」、②ともに支え合い、学び合う―「社会性・連帯性」、③見返りを求めない―「無償性・無給性」、④よりよい社会をつくる―「創造性・開拓性・先駆性」である。

現在は、読み聞かせボランティアを対象とした研修も多く開催されるようになっているが、研修を受けることは①「自主性・主体性」に関わっており、他者に押し付けたり、ましては他者がやってきたことに対して否定をしたりしてしまうと、他者の「自主性・主体性」が崩れてしまう恐れがある。また、活動仲間との良い雰囲気、ともに学び合う「社会性・連帯性」への配慮も必要である。

互いの経験値を押し付けではなく共有するという形で、グループ全体での成長を目指すことが今後の課題であると言える。

4-2-4 グループの継続や後継者育成における問題

A氏が所属するボランティアグループが結成されてから、およそ20年が経つ。その時から一緒にやっている仲間もいるが、もちろん辞めていったメンバーもいる。

A：途中が入ってきてくださって、短い時間にやめ、去って行かれた方も結構あるんです。だから、思っていたのと違うなって感じられたんだろうと思うし、自分の入って来られる時に、その人なりのイメージがあって、絵本に対する思いと、私たちはゆるいグループなので、そこらへんが波長が合わなかって、一緒にできなかった人た

ちもいるんです。

だけでも私たちは基本を入れてくれる人は本当にウエルカムで、一緒にやって行こうっていうことは大事にしているということは、みんな思ってるグループなんです。

グループで活動するにあたって、メンバー同士の性格だけでなくメンバーそれぞれの「読み聞かせボランティアに対するイメージ」や「絵本に対する思い」も重要であるということである。絵本に対する思いやボランティアグループに対する思いは人それぞれであり、異なる考えが受け入れられない場合は辞めていくこともある。それは、4-1-5のA氏の継続要因にもあった「一緒に楽しめるボランティアグループの雰囲気」にも関係している。

グループ継続のために、受け入れる側はこれまでの雰囲気を残しながら、新しいボランティアの考えを取り入れていく姿勢も必要かもしれないが、簡単なことではないだろう。

A氏の所属するグループには現在、後継者がいない。そのことについて以下のように語っている。

A：10年ぐらいは突っ走って、それから10年ぐらいはそれぞれ仕事と両立がなかなか難しくって、っていう感じで、かろうじて自分のグループの活動をやってきたんですけど、振り返ったら後継者が、メンバーに入ってる人がいないんです。それから他のボランティアグループはもうずいぶん高齢化して、そこも後継者がなかなかないような状態で、ブックスタートも本当に高齢化してて、難しいなあっていうのを感じだしたので、これはいけないと、あのやっぱりあの育てていかなきゃいけない、新しいグループも作っていかなきゃいけないなあって、私たちのグループでも声が出だして、それで今ちょうど、私の住んでるT市で、住民からの要望型で、なんかそういうの支援してあげるよっていう取り組みをするらしいというのが入ってきて、じゃあそういうことにも応募して、ちょっとそっちの活動も力を入れていこうというふうに言っています。

新しいボランティアを育てるための（中略）、マニュアルのようなものでできたら、それを購入して、みんなで読むとか、そういうお金にも使えるわけですね。だから資金ができれば、育てやすいなって。

で絵本作家を呼んだりとか、よそのボランティアグループ見学に行ったりとかするバス代に使うとか、資金がなくてもやらなきゃいけないんだけど、資金があると、よりやりやすいなということで、ちょうどそういう募集があるので、そういうこともあって、募集もあって、私たちは育ててなかったなっていうような話と、フィットしたんです。

A氏が所属するボランティアグループだけでなく、他のグ

ループにも後継者がおらず、世代継承性について喫緊の課題を抱えていることがうかがえる。この問題に対してA氏が所属するグループでは、要望型での支援を受けられる制度の利用を検討している。後継者育成へ向けて、メンバー集めや活動に関する講習会を開くにも資金や場所等が必要になり、なかなか進められていないグループも多いと考えられる。これについては、複数のグループを対象としたさらなる調査が必要であると考ええる。

最後にA氏は、これから読み聞かせボランティアを目指す人に伝えたいこととして、以下のように語っている。

A：やっぱり子どもたちに一人で読むようになるには、読んでもらう経験がないといけないので、その文化を届ける大人の存在は、絶対に必要だなって、そういうボランティアは役があるなと、家庭の親でも、家族でもいいんですけど、ほんと絵本は、その『だるまちゃんとてんぐちゃん』でも思ったんだけど、素晴らしい人間が作り出した絵本文化だなあとします。いろんなものがあるけれども、感動すると言うか、自分が好きになったものは、自信持ったらいいかなって、お話が好きなあとか、絵本が楽しいなとか、子どもがすすく大きくってほしいなって思う人は、是非始めて欲しいなあって、こう呼びかけようと思っています。

子どもたちには絵本を読んでもらう経験が必要であるため、それを届ける一つの役目を担っているボランティアの存在は重要であると述べられている。ボランティアの高齢化が進む中、新たな人材の確保へ向けて、世代継承性における課題改善が求められる。

5. まとめ

本研究であげた二つの問いのうち、一つ目の読み聞かせボランティアの継続要因については、①心の拠り所となった絵本、②楽しみにしてくれる子どもたちと絵本を味わう時間、③地域での社会貢献による自己肯定感、④フレキシブルな職場環境や応援してくれる家族の存在、⑤一緒に楽しめるボランティアグループの雰囲気があることがわかった。これは、1-3で田中らが子育てボランティア活動の継続理由として示した、「メンバー間の関係性」、「地域活動の意義」、「自分自身の楽しみ」のいずれも一致する結果であった。また、田中らがボランティアグループの継続要因として示す「グループメンバーが子どもに関する職業経験や社会的役割があること」、「子どもが好きで、子育て支援ボランティアを通じて母親世代と接点を持ち、地域で頼りにされる存在としてやりがいを感じていること」、「ボランティア活動が地域の仲間と交流できる機会であり、さらには自分の可能な条件で無理なく参加できること」についても、A氏の継続要因と共通している。本研究が目指す読み聞かせボランティアと、田中らが調査した子育て支援ボランティアの目的は異なるが、両者の継続

要因（理由）は共通している点が多いことがわかった。相違点は、A氏の継続要因の①心の拠り所となった絵本、②楽しみにしてくれる子どもたちと絵本を味わう時間、そして、④のうち、応援してくれる家族の存在であった。読み聞かせボランティア活動ならではの継続要因について、ボランティア経験者による語りの文脈と共に示すことができたことは、半構造化インタビューによる成果であると考ええる。

そして、二つ目の問いである読み聞かせボランティア活動の世代継承性における課題は、①活動仲間との交流の減少、②絵本を届ける立場であるボランティアとしての成長、③グループ内での経験値・知見統合の困難さ、④グループの継続や後継者育成における問題であることが明らかとなった。

読み聞かせボランティア活動の世代継承性に向けて、A氏のように長く継続している人々の継続理由を示し、読み聞かせボランティアの魅力を発信していくことが必要であると思われる。新しくボランティア活動を始める人々が、「良い仲間」と呼べるようなボランティアグループに出会い、子どもと絵本の世界を一緒に楽しむ体験をしていくなかで魅力を感じ、波及的に広がっていくことを望む。

6. 今後の課題

今回は、読み聞かせボランティア活動の継続要因と世代継承性における課題について、20年以上ボランティア活動に携わっているA氏のインタビューから考察を行った。質問者との対話の中で改めて経験や思いを振り返ることで語られた内容も多く、貴重な知見を得られたと考える。しかし、グループや地域によって事情は異なる。今後も研究を続け、特に、絵本の読み聞かせボランティアにおける世代継承性がどのような要因をもっているかについて、調査を行っていきたいと考える。

注

（注1）2007年に全国生涯学習フェスティバルが県で開催されることになり、それを成功させたいと、県の生涯学習課の人たちが、ネットワークの中心になりそうな比較的年齢の若いA氏のグループに声をかけたことがきっかけである。

（注2）4、5年前から、おはなし会を実施していた図書館は企業による運営へと変わり、買い物や観光に訪れた人々を対象におはなし会を開催している。

参考・引用文献

- 1) 読書推進運動協議会：全国読書グループ総覧：読書会・文庫・実演グループ・研究会・連絡会など 2018年度（2020）
- 2) 広瀬恒子：読書ボランティア活動ガイド—どうする？スキルアップ どうなる？これからのボランティア、一声社（2008）
- 3) 佐久間尚子、鈴木宏幸、大神優子、菊地紫乃、齋藤有：高齢者の絵本の読み聞かせボランティア活動と認知機能：（1）7年間の継続効果、日本心理学会第77回大会、625（2013）

- 4) 佐久間尚子、鈴木宏幸、大神優子、大塚紫乃、齋藤有：高齢者の絵本の読み聞かせボランティア活動と認知機能：（4）質問紙による7年間の追跡、日本心理学会第78回大会、760（2014）
- 5) 脇谷邦子：読書ボランティアの意義と課題（特集 これからの読書ボランティア）、子どもと読書（423）、親子読書地域文庫全国連絡会、2-6（2017）
- 6) 広瀬恒子：親地連 50年をふりかえって、子どもと本の50年 50周年記念誌、親子読書地域文庫全国連絡会（著、編集）、1-5（2019）
- 7) Erikson, Erik H., and Erikson, Joan M: The Life Cycle Completed, A Review Expanded Edition, New York: Rikan Enterprises, Ltd. (1997)（＝2001, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライスサイクル、その完結』みすず書房）
- 8) 田中富美子・佐藤裕見子・小石真子：地域における子育て支援ボランティア活動の継続要因、日健医誌 30（1）、108-114（2021）
- 9) 加納雅美：移民家族の言語課題を考える：ある在日日系ブラジル人二世のライフストーリーから、早稲田日本語教育学 30巻、早稲田大学大学院日本語教育研究科、89-108（2021）
- 10) 宮澤優弥：読み手は学校における読み聞かせ活動をどう意義付けているか、読書科学 第58巻 4号、212-226（2016）
- 11) 安達みのり：行政と市民が一体となって（特集 読書ボランティアを考える）、子どもと読書（369）、15-18（2008）
- 12) 笠井恵美：絵本の読み聞かせボランティアの選本における困難さの検討、人間学研究論集（2）、武蔵野大学通信教育部、99-110（2013）
- 13) 東京ボランティア・市民活動センター：ボランティア活動、4つの原則、ボラ市民ウェブ、<https://www.tvac.or.jp/shiru/hajime/gensoku.html>（閲覧日 2021年11月25日）

謝辞

本研究は2022-2024年度科学研究費補助金基盤研究(C)（JSPS 科研費 22K02401）の助成を受けている。本研究の遂行にあたり、調査にご協力いただいたA氏に深く感謝いたします。

受理 2023年1月18日

公開 2023年1月24日

<連絡先>

谷原舞

〒536-8585 大阪府大阪市城東区古市 2-7-30

大阪信愛学院大学

E-mail: tanihara@osaka-shinai.ac.jp